

「メステイサ」から「ハーフ」へ — 日本への国際移動と日系ブラジル人女性の人種化 —

渡 会 環

Abstract

This paper examines the racializations of Japanese Brazilian female migrants to Japan. Although it's common to be mixed-race in Brazil, Japanese Brazilian women who come to Japan as return migrants realize that their being *mestiça*, which means mixed-race female in Portuguese, now can be valorized as *haafu* and gives them a chance to work as *haafu models* in the Japanese printed media. Here I would like to address the following questions: To be successful as *haafu models*, how do Japanese Brazilian women perform, embrace or contest this racialized image? Are there any differences between being *haafu* and being *mestiça*? In the end, what does “*haafu*” mean to Japanese Brazilians, especially in terms of their transnational lives? By analyzing interviews with the models and modeling agencies, and observations of beauty pageants within the Brazilian community, I will show how their social positioning dramatically changes from one racialization to another, but this still allows them to manipulate their cultural capitals.

はじめに —国際移動と人種化—

(日本でモデルになるには) 普通のハーフじゃだめ。

(14歳のミスブラジル日本コンテスト予選参加者)

(今のモデル事務所と契約にいたったのは) 私がメスティサだったからだと思う。

(30歳日系ブラジル人女性モデル)

2008年、日本人がブラジルに移住して100年が過ぎた。移民の功績をたたえるため、1年間にわたり、日本とブラジル両国で様々なイベントが開かれた。日本のブラジル人コミュニティでは一番美しい日系人女性を選ぶ「ミスブラジル日本コンテスト (Miss Centenário Brasil-Japão)」が企画され、3月2日に名古屋で予選、5月8日に横浜で本選が開かれた。

これまでも日本人は移民先でミスコンテストを開き、彼／彼女らのコミュニティの象徴としてのクイーンを選出してきた。一例として、米国のハワイとサンフランシスコの「ミス桜祭りコンテスト (Cherry Blossom Festival Queen Pageant)」がある。先行研究は、こうしたミスコンテストが日本人移民とその子孫が「日本人らしさ」を再考する機会として機能してきたことを指摘している¹。ところが、ブラジルから日本へと帰還した日本人移民の子孫たちの間で行われたミスブラジル日本コンテストでは、移民100周年への思い、日本人の子孫であることの意味についての議論を参加者からきくことはなかった。また、主催者側が参加者に尋ねることもなかったのである。

参加者の間で熱心に行われていたのは、東京のモデル事務所の情報交換である。実際、71人の予選参加者が本番前にウォーキングを練習していた廊下では、新しいモデルを発掘するために名古屋のコンテスト会場に来たモデル事務所のスタッフが、2、3人の少女をカメラに収めていた。写真撮影を受ける少女を横目にみながら、2人の少女が日本でモデルになるためには何が必要かと日本語で話していた。その答えが、本稿の冒頭で引用した「普通のハーフじゃだめ」である。

短・中期間での労働を目的とした「デカセギ」に代表される日伯間の移動を通じて来日した女性たちの中には、ポルトガル語で混血の女性を意味する「メスティサ (mestiça)」である自身の外見が、日本のメディアで「ハーフ」として評価され「ハーフモデル」として働くチャンスがあることを知った者がいる。「ハーフ」とは、日本社会で人に対して用いられる場合、国籍の異なる両

親から生まれた人物のことを意味する。しかしながら実際には、日本人の親とアジア系ではない、より正確に言うなら「白人」の親との間に生まれた人物のことを指し示す際に使われてきた (Greer 2005; Fish 2009; Kamada 2009)。これには、「白人的」身体を持ったハーフが日本社会でより可視化されてきたことが関係している。両親がともにアジアの国の出身者である者と比べて外見が目立ち、そうした彼らの身体がメディア業界で注目されてモデルやタレントとして消費されてきたためである。「ハーフ」という言葉の社会への浸透は、1970年代に活躍した混血の女性アイドルグループ「ゴールデン・ハーフ」の活躍によるものだとされる (マーフィ重松 2002: 101-114)ⁱⁱ。

外見が第一に注目されて「白人的」身体がメディアで消費され、「日本人とブラジル人のハーフ」と言い方によって「日本人」と「ブラジル人」をかけ合わせ以前の純粋な「人種」にさせてしまうなど、ハーフという言葉には「人種」があたかも実存するかのように思わせる力がある。「人種」は科学的根拠を持たず、差別を生みだすための社会的構築物であると指摘されて久しい。そこで近年では、「人種」として人々が差別化される「人種化 (racialization)」の研究が進められている (竹沢 2005)。本稿の関心も「日本とブラジルのハーフ」、「ブラジル人」や「日系ブラジル人」として、日系ブラジル人女性が日本社会で人種化される一つの過程の解明にある。なお、本稿では「異人種間結婚」や「混血」という表現を用いているが、異なるカテゴリーに人種化された人の中での婚姻と彼らの子どもを意味するものとする。

本稿では、日本でモデルになることを夢見る、あるいはその職に既に従事している日系ブラジル人女性を取り上げ、国際移動に伴う人種化の一過程を明らかにする。そこで、次の具体的な問いを設定する。ハーフモデルとして成功するために「ハーフ」というラベルを日系ブラジル人女性はどのように演じ、利用し、批判をしているのだろうか。ブラジルで「メスティサ」であることと、日本で「ハーフ」であることの意味は異なるのだろうか。「ハーフ」は日系ブラジル人のトランスナショナルな生活においてどのような意味を有しているのか。これらの問題を考えることを通じて国際移動によって多層化する人種化の一過程を明らかにし、多層化は日系ブラジル人女性が自身の文化資本を操作す

る余地も与えていることを指摘するⁱⁱⁱ。

本稿は、2008年以來、日本のブラジル人コミュニティのミスコンテストおよびモデルレッスンでの参与観察と、モデルとモデル志望者、モデル事務所関係者、ミスコンテスト関係者に行ったインタビュー調査から得られたデータを使用して考察したものである^{iv}。なお、プライバシー保護のため、本稿では被調査者の人名には仮名を用いる。

ブラジル社会の「メスティサ」としての日系ブラジル人

ポルトガルによる植民地化が開始されて以来、ブラジルでは長きに亘り混血化が進んできた。混血化とその結果としての文化の混淆を基盤として、ブラジルのナショナル・アイデンティティも構築されてきた (Freyre 1978; Ortiz 1994)。

日系ブラジル人の中でも異人種間結婚率は高い。1987年の時点で2世の間では6パーセント、3世では42パーセント、4世では61パーセントとのデータがある (サンパウロ人文科学研究所 1990)^v。

こうした混血化の進展を理由とし、さらには米国との比較から、ブラジルは人種差別のない国としていわれることがある。ブラジルには、一人でもアフリカ系の祖先がいたら「黒人」とする米国のようなワンドロップ・ルールはない。「白」と「黒」の肌の色の間にはグラデーションがあり、グラデーションに応じた様々な呼称がある。だが、米国と同様にブラジルでも「白人」が社会階層の上層に位置付けられている。

肌の色によって様々な呼称があることは、言い換えると、ブラジル人が些細な外見上の差異を見極めて人をカテゴリー化するのに長けているということである (三田 2005: 219)。実際、ブラジルでは外見が個々人の違いの重要な決定要因であり、混血であろうとなかろうと、日系人は非常に有微な存在として注目される (Ishimori 2005; Lesser 1999, 2007)。インタビューした18人の日系ブラジル人女性のうち16人が、国籍また人種としての「日本人」を意味する「ジャポネーザ (japonesa)」やその略である「ジャバ (japa)」と呼ばれた経験

を有する^{vi}。

混血性が問われるのは日系人の間だけある。彼らの中で日本人以外の祖先を持つ者を指すのに「メスティソ (mestiço)」が用いられる。女性に対して用いられるのが「メスティサ」である。ポルトガル語のメスティソは、スペイン系アメリカ諸国の「メスティソ (mestizo)」が主として先住民とヨーロッパ系の混血を指すのとは異なり、様々な人種の混血として広義に解釈されている (Skidmore 1974: 23)。しかしながら、ブラジルでは国民の大半が混血であり、混血者の外見をより詳細に描写できる多くの言葉もあるため、呼び名としてメスティソが用いられることはほとんどない^{vii}。

しかしながら、日系ブラジル人女性が「メスティサ」であることは、ブラジルは「メスティソの国 (um país mestiço)」というナショナル・アイデンティティの根幹と関わるために、彼女たちが「ブラジル人」であることを否定するものではない。日系人の間でも「メスティサ」は「ブラジルらしさ」として捉えられている。「メスティサ」と呼ばれることで日系社会からは距離ができるが、ブラジルの主流社会からの距離は縮まるのである。

日本社会の「ハーフ」としての日系ブラジル人

この「ジャポネーザ」や「メスティサ」の中から、デカセギの両親に同伴して、あるいは自身がデカセギとして来日する女性が出てきた。そして、1990年の日本の出入国管理及び難民認定法の改定に伴って展開したデカセギブームにハーフモデルブームが重なったことで、混血の日系ブラジル人女性がハーフモデルの卵として着目されることとなる。

入管協会の統計によれば、ミスブラジル日本コンテストが開催された2008年の時点で日本に居住する10歳から24歳までのブラジル人女性の数は29,300人である (財団法人入管協会 2009)。そのうちのほとんどが混血であるため、ハーフモデルを求める日本のモデル事務所にとってこの数字は魅力的なものとなっている。かつてはブラジルから混血のモデルを「輸入」していたモデル事務所も、より低いコストかつ低いリスクでモデルを日本で探すことが可能と

なった^{viii}。

インタビューをしたモデル事務所によると、「白人系」のハーフモデルは広告で「高級感」を演じられるのだという。そして、同じ高級感を表現しながらも、「白人系」外国人モデルに対して日本人消費者は外見の違いから外国人のようにはなれないと感じるが、ハーフモデルには近づくことができると感じるため、それが購買意欲へとつながるといふ。「白人的」身体を持ったハーフモデルの需要が高い理由の一つがここにある^{ix}。

需要とともに今日ではハーフモデルの供給も増えている。そのため、本稿の冒頭で引用した「普通のハーフじゃだめ」という少女の言葉のように、独自の表現力を持ったハーフモデルが求められるようになっていく。こうした需要に対し、ミスコンテスト主催者の日系ブラジル人女性は、日系に限らずブラジル人女性の中から日本のモデル事務所が求めるあらゆるタイプのモデルを見つけ出すことができ、さらには事務所の所属モデルに多様性を加えることができるとインタビューで語っている。

未来のハーフモデルを探しに、モデル事務所のスタッフは、ブラジル人コミュニティでのミスコンテスト、独立記念日イベント、ディスコ、学校行事など、ブラジル人が多く集まる場所に足を運んでいる。スタッフがブラジル人であることもある。

モデル事務所がコミュニティまで足を運んでくることは、国籍に関わりなく若い女性の間にもみられる「モデルになる」という夢の実現可能性を日系ブラジル人女性には強く感じさせることになる。ミスブラジル日本コンテストに参加した 14 歳の少女は、コンテストへの参加が「他の扉をひらいてくれる」と語った。つまり、工場労働の必要がない、日本でのよりよい生活を期待しているのである。こうして、ミスコンテストは今日、少女さらには家族の期待や夢がメディアの需要と交差する場となっているのである^x。

しかしながら、日系ブラジル人女性が学校や職場といった日常生活で「ハーフ」と呼ばれることは少ない^{xi}。名古屋でハーフモデルをしているリサ (23 歳) は、小学校と中学校のクラスメートからは「ブラジル人」と「外人」としか呼ばれたことがないという。リサは 3 歳から日本に住み、小学校と中学校は

日本の公立校に通った。彼女が「ハーフ」という言葉を知ったのは中学校に入ってからである。小学校のときにクラスメートとは「違う」と言われたという経験についてより詳しく尋ねられて、彼女は人種化される過程を次のように語った。

たとえば、なんで鼻が高いんだよ、みたいな。あと、見た目以外だと、なんで日本に来たの、みたいな。なんか、私はどちらかというといほとんど、一番「間」らへんで、ブラジルにいと日本人と言われ、日本にいと日本人じゃないって言われる。間の顔なので。見た目でいわれることより、その、もう、人種。人種でいわれることが多かったです。「ブラジル」っていうひとまとめ。

彼女の語りから、最初に注目された外見の違いが次第に重要視されなくなり、他のブラジル人との違いも考慮されない「ブラジル人」としてリサはクラスメートからまなざされるようになったことがわかる。「ブラジル人」はブラジル人の多様性が無視された一つのカテゴリーとして構成されている。そのため身体的特徴に基づいた人種化ではないが、変えることができない属性としてリサは感じ、これを人種として表現している。

ハーフモデルとして東京で働いたジャーニも、彼女が育った静岡県内の町では「ブラジル人」としか呼ばれたことがないという。モデルを一時休業して東京から静岡に戻ったときに受けた呼称の変化について、次のように語った。

静岡ってすごいブラジル人がいるじゃないですか、で、問題もいっぱいあって。逆に、こっちに来るときのほうが怖い、自分が「ブラジル人」って言うのが。東京だといろんな国の人がいるから、プレコンセイト（preconceito、偏見）とかがない。日本人の方も慣れてるし。でもこっちのほうは、なんか、「ブラジル人」か「日本人」だけ。「ハーフ」っていうのはない。（…）ここは（ブラジル人）コミュニティもあるから、どうしても二つに分かれる。

ジャーニの語りからも、「ブラジル人」や「外人」と比べて、「ハーフ」には

日本社会との距離の近さを日系ブラジル人女性が感じていることがわかる。日系ブラジル人女性が受ける人種化によって変化する日本社会との距離について、次に取り上げる。

ハーフモデルと日本人読者の間の距離の操作にみる「ハーフ」

「グラモデル15人 THE 私服 SHOW!!」。女性ファッション誌『グラマラス』の2008年1月号の表紙の見出しである。『グラマラス』はこの号でモデルのライフスタイルを紹介する特集を組んだ。雑誌と特別契約を結んだモデルが毎号登場する「専属モデル」というシステムを持つ日本の女性ファッション誌ではこのような特集は多い。“They are just like us!”との小見出しをつけたことからわかるように、モデルは読者に近い存在として設定されている。雑誌に書かれた名前やプロフィールから、読者はモデルの家族構成を知ることができる。

モデル紹介の際、日系ブラジル人女性は「日本とブラジルのハーフ」あるいは「日本人の父とブラジル人の母を持つハーフ」と紹介されてきた。ほとんどの場合、この「日本人の父」は日本国籍を持たない日系ブラジル人である^{xii}。「日系ブラジル人」という表現を、インタビューをしたモデル事務所は意図的に用いていない。クライアントの間に日系ブラジル人に対する偏見がみられるためだという。日系ブラジル人から連想されるのは外国人工場労働者であり、撮影現場で「両親はデカセギか」とたずねられることもある。ハーフモデルが演出する高級感のイメージを保つため、事務所のスタッフはそのような質問を受けた際には話題をかえるようにしている。日本の国籍の母とドイツ国籍の父を持つハーフモデルを「日本とドイツのハーフ」とクライアントに紹介するのと同様、日系ブラジル人モデルも「日本とブラジルのハーフ」としている。

日系ブラジル人モデルには、読者とクライアントが彼女たちにより親近感を感じるためのさらなる操作がなされる。その一つが芸名をつけることである。ポリアーナ・ルフエブル・ナカジマ (Poliana Lefebvre Nakajima) はモデルの仕事をはじめたとき「中島リア」という芸名を事務所から与えられた。ポリアーナは日本人にとってはなじみのないブラジル人の名であり覚えてもらいにく

かったため、事務所はポトナをとってリアとしたのである。さらに、母方のフランス系の姓をとり、残った「ナカジマ」の姓を漢字で表記した^{xiii}。漢字で書かれた姓で読者にはポリアーナが日本人の血をひくことを明確に示して親近感を、カタカナ書きの名前で外国とのつながりを強調して距離感を二つ同時に創出するのである^{xiv}。

日本社会から他者化されるという点で、これまで「ハーフ」として位置付けられることは「外人」として位置付けられるのと同じであった (Greer 2005: 10)。しかしながら、国際結婚の増加に伴うハーフの増加、ハーフモデルの活躍などにより、「ハーフ」に対するイメージや意味は刻々と変化している。本研究の日本人およびブラジル人のインフォーマントの発言から、今日では「ハーフ」はより「日本人」に近い存在として位置づけられていることが分かる。

「ハーフ」を演ずることへのとまどいと抵抗

日系ブラジル人女性にとって、「ハーフ」とみなされることは日本社会との距離が縮まることを意味するため、「ハーフ」という言葉に対しては良い印象を抱いていることが多い。また、ブラジルには「メスティサ」という言葉があったために、「ハーフ」を知ったとき、当初は「メスティサ」と同じ意味に理解したようである。

しかしながら、彼女たちは次第に「ハーフ」と「メスティサ」の間に違いを見出していく。例えば、ポリアーナは、「ハーフ」には日本国籍の有無が大きく関係していると感じている。彼女はインタビューで、自分は本当のハーフではないと語った。父がブラジル国籍を有するためだという。彼女の父は2世で、ブラジルへと渡った日本人移民の両親を持ち、ブラジルで生まれた。モデルを始めたころ、撮影現場のスタッフはポリアーナの片方の親が日本人であると思っていたという。両親とも日本国籍を有しないと知ると、次第に彼女の振る舞いや外見が「ブラジル人らしい」と捉えられるようになったという。

日本人の祖先しかいないが、ユキ (22 歳) には、中学時代にクラスメート

から何度かハーフかどうか尋ねられた経験がある。それは彼女の外見や振る舞いによって判断されたのではなく、国籍によるものであった。クラスメートは、完全に日本人の外見を持った彼女が日本国籍を有していないことを理解できなかった。理解できないゆえに、外見ではうかがえられないがユキは日本国籍の親と外国籍の親のハーフでありそれがゆえに日本国籍をもたない、と考えたようである。

ポリアーナとユキの体験が示すのは、日常生活の中で「ハーフ」が話題となる場合、外見の問題だけではなく、国籍もかかわるということである。日本国籍を持たない日系ブラジル人女性は、ここで「外人」、「ブラジル人」、「日系ブラジル人」として人種化されやすくなる。

ジャーニは、「ハーフ」が二つ以上のアイデンティティを抑圧しまうことを指摘している。ジャーニはハーフモデルとして働いたが、日本人の祖先はいない。彼女の父はヨーロッパ系の祖先を持つブラジル人で、母は先住民の祖先を持つブラジル人である。だが、ハーフモデルを多く採用していた東京のモデル事務所と彼女が契約を結んだ際、契約には「ハーフモデル」として働くことが盛り込まれ、撮影現場では「日本とブラジルのハーフです」と自己紹介するよう指示されたという。ジャーニは、撮影で着る洋服やカメラマンが求めるイメージによっては、彼女が持つ多様な背景を伝えたという。

(事務所の方針に従って)自分は日本とブラジルのハーフだよ、って言っていた。でも、後から、自分でも気づいて、私はインディアンの血が入って、お父さんがちょっとヨーロッパのほうの血が入っているんだよ、みたいな、でも、ブラジルで生まれたからブラジル人だよって答えていたときもあった。(…)たとえば、この仕事でインディオの血が入っているって言ったらいいかなあ、とか。そういうときは面倒くさいけど、説明していた。

同様の行動をポリアーナもとっている。彼女も「ハーフ」の構成要素の「ブラジル」の多様性を語ることで2つ以上の複雑なミックスされたアイデンティティを表現した。混血に対して「ハーフ」を主として用いる日本に対して、

「メスティサ」を用いるブラジルのほうが、多様性を表すことができる点で進んでいる、と彼女たちは感じている。

おわりに

日系ブラジル人女性は、ブラジル、その中の日系社会、さらには移住先の日本社会からと、それぞれの社会で人種化を受けてきた。日本への国際移動によって新たに受けることとなった「ハーフ」という人種化は、日系ブラジル人女性たちにとっては日本社会でモデルとして成功するための戦術となり、「日本人」そして日本社会への接近を感じさせるものでもあった。ところが、彼女たちの「ハーフ」の構成要素でもある、「ブラジル人」、「外人」あるいは「日系ブラジル人」であることが強調されると、「ハーフ」とはみなされなくなり、近づいたと思われた日本社会との距離が一気に遠ざかる。

「ハーフ」はまた、混血化が進んでいる日系ブラジル人にとって、二つ以上の複雑なミックスされたアイデンティティについて抑圧する作用をも有している。そのため、インタビューを受けた女性たちの間では、祖先から受け継いだ多様性を表すことができる「メスティサ」によりアイデンティファイしていることがみられた。そのうえ「メスティサ」であることは「ブラジル人」であることも否定しない。国際移動の結果、「メスティサ」に代表される多様性をナショナル・アイデンティティとするブラジルの評価が高まったのである。

参考文献

- Brazilian Institute of Geography and Statistics. 1999. What Color are You?. Levine, Robert M. and John J. Crocitti(ed.) *The Brazil Reader: History, Culture, Politics*. Durham: Duke University Press, pp. 386-390.
- Creighton, Millie. 1997 *Soto Others and Uchi Others: Imaging Racial Diversity, Imagining Homogeneous Japan*. Weiner, Michael(ed.) *Japan's Minorities: The Illusion of Homogeneity*. London and New York: Routledge, pp.211-238.
- Fish, Robert A. 2009. 'Mixed-blood' Japanese: A Reconsideration of Race and Purity in Japan. Weiner, Michael(ed.) *Japan's Minorities: The Illusion of Homogeneity*. Second edition,

- London and New York: Routledge, pp.40-58.
- Freyre, Gilberto. 1978. *Casa-grande & senzala: Formação da família brasileira sob o regime da economia patriarcal*. 19ª edição, Rio de Janeiro: Livraria José Olympio Editora.
- Greer, Tim. 2005. The Multi-Ethnic Identity Paradox: Toward a Fluid Notion of Being 'Haafu'. *Japan Journal of Multilingualism and Multiculturalism*. vol.11, no.1, pp.1-18.
- Ishimori, Karina Midori. 2005. *Viver num corpo estrangeiro: Sentidos e significados do ter e ser um corpo oriental para adolescents nikkeis insatisfeitos com suas fenotípias*. Master dissertation in Social Psychology, Universidade Católica de São Paulo.
- Kamada, Laurel Diane. 2005. Celebration of Multi-Ethnic Cultural Capital among Adolescent Girls in Japan: A Post-Structuralist Discourse Analysis of Japanese-Caucasian Identity. *Japan Journal of Multilingualism and Multiculturalism*. vol.11, no.1, pp.19-41.
- King-O'Riain, Rebecca Chiyoko. 2006. *Pure Beauty: Judging Race in Japanese American Beauty Pageants*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Lesser, Jefferey. 1999. *Negotiating National Identity: Immigrants, Minorities, and the Struggle for Ethnicity in Brazil*. Durham: Duke University Press.
- . 2007. *A Discontented Diaspora: Japanese Brazilians and the Meanings of Ethnic Militancy, 1960-1980*. Durham and London: Duke University Press.
- Maia, Suzana. 2009. Sedução e identidade nacional: dançarinas eróticas brasileiras no Queens, Nova York. *Revista Estudos Feministas*. 17(3), pp.769-797.
- Mori, Koichi and Barbara Inagaki. 2008. Os concursos de beleza na comunidade nipo-brasileira e a imagem da mulher nikkei. *Revista de Estudos Orientais*. n.6, pp.131-174.
- Murphy-Shigematsu, Stephen. 2008. 'The Invisible Man' and Other Narratives of Living in the Borderlands of Race and Nation. Wills, David Blake and Stephen Murphy-Shigematsu(eds.) *Transcultural Japan: At the Borderlands of Race, Gender, and Identity*. London and New York: Routledge, pp.282-304.
- Ortiz, Renato. 1994. *Cultura brasileira e identidade nacional*. 5ª edição. São Paulo: Editora Brasiliense.
- Sato, Kozue. 2010. *The Representation and Role of Mixed-Race 'Haafu' Models in Contemporary Japanese Female Fashion Magazines*. Master dissertation in Global Studies, Sophia University.
- Skidmore, Thomas E. 1993. *Black into White: Race and Nationality in Brazilian Thought*. 1993 Edition, New York: Oxford University Press.
- Telles, Edward E. 2006. *Race in Another America: The Significance of Skin Color in Brazil*. Princeton: Princeton University Press.

- Tsuda, Takeyuki. 2003. *Strangers in the Ethnic Homeland: Japanese Brazilian Return Migration in Transnational Perspective*. New York: Columbia University Press.
- Yano, Christine R. 2006. *Crowning the Nice Girl: Gender, Ethnicity, and Culture in Hawai'i's Cherry Blossom Festival*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- イシカワ、エウニセ・アケミ. 2008. 「『日本の記憶』と『ブラジルの記憶』—日系ブラジル人のアイデンティティー—」『トヨティズムを生きる—名古屋発カルチュラル・スタディーズ』せりか書房、73-82 ページ.
- 財団法人入管協会. 2009. 『平成 21 年度版在留外国人統計』財団法人入管協会.
- サンパウロ人文科学研究所. 1990. 『ブラジルに於ける日系人口調査報告書—1987・1988—』サンパウロ人文科学研究所 (mimeo).
- 竹沢泰子編. 2005. 『人種概念の普遍性を問う—西洋的パラダイムを超えて—』人文書院.
- ハタノ、リリアン・テルミ. 2009. 『マイノリティの名前はどのように扱われているのか—日本の公立学校におけるニューカマーの場合—』ひつじ書房.
- 前山隆. 1996. 『エスニシティとブラジル日系人—文化人類学的研究—』御茶の水書房.
- 松宮朝・余語建人. 2010. 「マス・メディアにおける『ブラジル人』言説の変容 (上)」『愛知県立大学教育福祉学部論集』第 58 号、61-66 ページ.
- マーフィ重松 S. 2002. 『アメリカンの子供たち』(坂井純子訳) 集英社新書.
- 三田千代子. 2005. 「住民の混血化」ブラジル日本商工会議所編『現代ブラジル事典』新評論.
- . 2009. 『「出稼ぎ」から「デカセギ」へーブラジル移民百年にみる人と文化のダイナミズム』不二出版.

注

- ⁱ ハワイの日系人コミュニティでのミスコンテストについてはヤノ、サンフランシスコ、シアトル、ロスアンジェルスについてはキング・オーライアンによる先行研究がある (Yano 2006; King-O'Riain 2006)。これらの先行研究の関心事は、コンテストの主催者のように、日本人らしさや日本人の境界を問うものである。2008 年にはブラジルの日系人コミュニティのミスコンテストを取り上げた論文が発表されたが、米国の事例研究と同一の問題関心をもつ (Mori and Inagaki 2008)。
- ⁱⁱ 国籍の異なる両親を持つ子どもは日本社会に常に存在し、子どもに対する呼称は時代ごとに変化した。その変遷については本稿では扱わない。だが、ここで、「ハーフ」という言葉が広く社会に浸透する前、第二次世界大戦終結後以降に用いられた「混血児」について取り上げたい。こうした子どもの多くは、占領軍兵士と日本人女性の間に生まれた。子どもが日本で成長して就学期を迎えると、日本社会では子どもの

就学問題やアイデンティティ問題が懸念され、「混血児研究」が展開された。その「混血児」は、青年期を迎えるとその身体が着目され、モデルやタレントとして活躍の場が与えられるようになる。結果、1970年代にファッションブルな意味が加えられた「ハーフ」が「混血児」に替わって広く社会で使われ始めるようになる。その後、日本の国際化の文脈の中で増加した国際結婚によって誕生した「ハーフ」の、言語をはじめとした文化資本に関する「ハーフ研究」が展開する (Greer 2005; Kamada 2009)。現在では、「ハーフ」から「日本人」の境界や言説を問う研究も展開している (Wills and Murphy-Shigematsu 2008; Fish 2009)。

- iii 1822年に独立して以来世界の様々な国から移民を受け入れてきたブラジルは1985年には移民送出国となった。1980年代にブラジルを襲った経済危機により、中間層の中から海外に就労の機会を求め、国境を越えて移動する人々が出てきたのである (三田 2009: 8)。ブラジル人が移住先で受ける人種化とそれを戦術に変えていくことについて、米国の事例を扱った先行研究がある (Maia 2009)。日本の事例では、イシカワやツダが日系ブラジル人のアイデンティティに関する研究の中で国際移動によって変化した呼称がアイデンティティに与えた影響を論じており、人種化の過程の一部が分かる。ブラジルで「日本人」と呼ばれていた日系ブラジル人は日本では「ブラジル人」と言われるようになり、それに伴って彼らは「日本人」から「ブラジル人」としてアイデンティティを表すようになったという (Tsuda 2003; イシカワ 2008)。
- iv インタビューは、モデルとして事務所所属し働いたことがある9人とモデルとして働くことを希望している7人の女性、ブラジル人コミュニティで開かれた最初の大規模なミスコンテストに参加した女性1人、ミスコンテスト関係者3人、3つのモデル事務所、モデル事務所とコネクションを持つ日系ブラジル人1人に行った。
- v 1987年と1988年にブラジルでは日系人の全家庭を対象とした大規模な人口調査が実施された。
- vi 「ジャバ」は軽蔑的にも使われることがある。インタビューで「ジャポネーザ」と呼ばれたことがないと言った女性の1人は緑の目と明るい髪の毛の色を有している。もう1人は、4歳のときに来日したためにブラジルでの生活をほとんど覚えておらず、「ジャポネーザ」と呼ばれていたかについても定かではなかった。
- vii ブラジルの北東部の州では、スペイン語と同じく、先住民とヨーロッパ系の混血を指すのにメスティソが用いられることがある。肌の色の違いに基づく呼称が実際には何種類ほどあるのかについてはあるが、1976年にブラジル地理統計院 (Instituto Brasileiro de Geografia e Estatística-IBGE) が発表したリストには134の呼称が挙げられている。これは、国勢調査の際に被調査者に自由回答してもらった肌の色をまとめたものである。134の中には肌の色を超えた身体的特徴や性質、社会的地位を表した

- ものも含まれている (Brazilian Institute of Geography and Statistics 1999: 386-390)。
- vi 1980年代後半より、ブラジルの日系人コミュニティでのミスコンテスト優勝者はモデルとして働くために来日するようになった (Mori and Inagaki 2008)。本研究の被調査者もそのような経験を有する。彼女は地元の日系人コミュニティのミスコンテストに優勝した後、日本でモデルとしてのチャンスを探してみないかと誘われ、1995年、16歳の時に来日したという。
 - vii 日本の広告における外国人モデルを研究したクレイトンは、「白人的」身体に投影されるイメージとして「進歩」、「ファンタジー」、「セクシー」、「わがまま」を指摘している (Creighton 1997)。「ファンタジー」とは「リアルではない」(Creighton 1997: 214) ことであり、それと「セクシーさ」を利用して、白人モデルは肌が露出される広告にしばしば使われてきた。肌を露出しているにもかかわらずそれが白人モデルだと日本人消費者にとってはリアルには映らず、いやらしさを感じないためだという (Creighton 1997: 217-218)。この点に関してはインタビューをしたモデル事務所も同様のことを語っている。ハーフモデルが広告で下着を着ていてもいやらしさがないという。このことより、クレイトンが指摘した「白人的」身体に投影されるイメージをハーフモデルも演じていることが分かる。このほか、ハーフモデルによって演じられるのは「セクシーさ」であると佐藤は指摘している (Sato 2010)。
 - viii ブラジル人コミュニティのミスコンテストは日系ブラジル人女性がモデルとしてのチャンスを探し始める場である。ほとんどのコンテストは、ブラジル人が多く居住する愛知県、静岡県内で行われている。距離、言語、経済的な制約から、この地域に住む少女が東京まで出てチャンスを探すのは難しい。コンテスト主催者はこの点を理解している。さらには、2004年から2010年まで、モデル発掘を目的とした「トップモデルジャパン (Top Model Japan)」というコンテストが岐阜県内で行われていた。形式上は日本人の参加も可能であった。しかしながら、主催者によれば、2009年までの日本人参加者はわずか3人である。
 - ix 日本の学校で教育を受ける機会がなく、日本語もできずにブラジル人コミュニティの中だけで交友関係がある場合、「ハーフ」という言葉さえ知らない。実際、インタビューをした女性のうちの2人が知らなかった。一人は日本に住んで10か月でブラジル人学校に通っており、もう一人は勤めている工場での同僚はほとんどブラジル人であり買い物やレジャーといった生活もコミュニティ内で完結しているためである。
 - x インタビューしたモデルの中には、父が国籍も育ちも日本である者が1人、ブラジルで生まれたが出生時に日本政府に届け出をした関係で日本国籍を有している父を持つ者が1人いた。だが、2人ともブラジル国籍のみを有していた。近年、日系ブラジル人女性モデルの中から女性ファッション誌の表紙を飾るなど「トップモデル」と

して活躍する者が増えたこともあり、「日系ブラジル人の父とブラジル人の母を持つ」というモデル紹介もみられるようになった。そのことは「ハーフモデル」から「ブラジル人モデル」への移行であるのか、「ハーフらしさ」ではなく別の文化資本を売りとするモデルの誕生を意味しているのかについては、稿を改めて論じたい。

- xiii ハーフモデルの芸名のつけ方に厳格なルールはなく、日本人消費者やクライアントがその芸名を容易に覚えられるかどうかを最も重視される。日本的な名だけを芸名とするときもある。それは、日本人消費者が覚えやすいのと同時に、ハーフモデルの日本とのつながりを明確に示す効果がある。
- xiv エスニック・マイノリティの間にみられる主流社会との距離感を縮める形での名前の変更について、アイデンティティ喪失の危険とハタノは指摘する。ハタノは日本の公立学校に通うブラジル人とペルー人の間で行われている名前の変更について調査を行った。名前の変更は通常は学校側から求められる。外国に起源を持った姓と名がとられ、日本的なものが残されるという。ハタノはマイノリティが自身の名前を使う権利を主張する(ハタノ2009)。